

〈研究論文〉

地域づくりにおける文学館の役割 —金沢市の泉鏡花、徳田秋声、室生犀星記念館を中心として

姜 東 星

【要旨】

本稿では、「地域づくりにおける文学館の役割—金沢市の泉鏡花、徳田秋声、室生犀星記念館を中心として」の事例を考察することによって、文学的な要素に基づくまちづくりの魅力を明らかにすることを目的とする。地域観光地づくりの根底に据えるキーワード「交流すること」、「心のふれあい」を文学館の役割に結び付けて探る試みである。

さらに「地域の歴史に息づく精神性」を喚起させる文学という着眼点をもとに地域の精神性の掘り起こしに主導的な役割を發揮している文学館という視点から、文学館と地域づくりとの関係はどのようなものなのか、掘り起こすものはどのようなものなのか、文学館と地域づくりの相互生成にどのように体现されていくのかということ明らかにしようとするものである。

文学館の生成は、能動的に故郷へ反哺（恩返し）すること、文学精神の継承は地域づくりの精神風土に貢献していくという、文学館の「内発型のものとなる」地域づくりの取り組みも検討する。

キーワード：文学館、作家、地域づくり、相互生成、反哺（恩返し）、精神、故郷

はじめに

江戸時代「加賀百万石」の城下町¹として栄えた金沢市は、城下町の風情が残る古都の佇まいが特徴的である。金沢漆器・加賀友禅・九谷焼・金沢仏壇・金沢箔など、「いずれも手間ひまのかかる根気のいる²」伝統工芸の技術と類まれな和の美意識が受け継がれている。また、「天下の書府」³とも呼ばれた金沢の地に、多様な個性のある文学者・思想家・学者が輩出した。

国の重要文化財に指定されている旧制第四高等学校⁴の本館である石川近代文学館⁵では、石川県ゆかりの作家60余名の著書・原稿・遺墨・愛蔵品・愛用品などが展示されている。金沢は地元の人に愛されている「学都」のまちの歴史的背景がある。また、「金沢の三文豪」と称される泉鏡花（1873～1939）、徳田秋聲（1871～1943）、室生犀星（1889～1962）の記念館が生まれ故郷の金沢に建っている。日本の「明治・大正・昭和の三代を文壇の第一線に生き

た文豪の息遣い⁶」が感じられる文化施設である。そこに作家たちが育んだ精神的風土が文学と地域づくりの結節点になっていくと言えよう。

ところで観光分野においては、日本の“地域づくり＝観光地づくり”の政策上の質的転換の形成を求めて、「地域に息づいていた歴史、伝統、人間関係、土地利用などの連続性⁸」の創出、とりわけ魅力ある観光地づくりの実現には、「地域の歴史に息づく精神性⁹」の喚起といった社会的、文化的発展に寄与することが望まれている。「近年、日本の至る所で博物館を中核施設として点在する文化遺産と連携した新たな観光・まちづくり政策が展開してきている¹⁰」との報告を踏まえて理解したい。ここまでの個性的な地域環境づくりに文学館の導入といった据え方があるという、地域の活気づけに重要な役割を果たしていると考えられる。

文学館の役割について中村稔（2001）は「図書館的機能と博物館的機能¹¹」を果たす施設であると述べている。また、文学館は「地域の文学活動の中核的施設として活動するには、文学講座、文学教室、文学散歩の類が一つであり、刊行物の発行もその一つで」あり、「自治体主体の文学館であればその利益が直接、間接に市民に還元さなければならぬ」と指摘している。「文学館は観光施設たりうるか¹²」という問題意識を考えさせられる。

文学館の役割の研究については、「文学館という施設そのものを研究対象とする¹³」全国文学館協議会¹⁴が先駆けて 1995 年に発足した。文学館の役割の事例研究について、岡野裕行（2006）「日本近代文学研究における文学館の役割—『全国文学館協議会』加盟文学館の発行物を中心に—」、山岸郁子（2011）「<資源>としての文学」など多数の先行研究があるが、文学館とまちづくりに関する研究、地域づくりにおける本論文の副題にある事例研究はまだ少ない。

日本観光立国推進基本計画（2012）¹⁵における「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化」に係る取り組みの支援について、「我が国の『たから』である地域の多様で豊かな文化遺産を活用し、（中略）地域に伝わる伝統芸能等の後継者育成、民俗芸能等の発表機会の確保、地域の美術館・博物館における地域の文化資源・人材を活用した取組や外国人利用者等に対応する取組、重要文化財建造物の公開のための施設・設備の整備、史跡等の復元・公開活用等に対して支援する¹⁶」と記されている。

その文化施設を活用したニーズと指針に応える一つの方向は、『ミュージアム観光¹⁷』という新しい観光分野が定着しつつある（須田 2009）。須田寛は「多くの博物館¹⁸は立地上の特性を活かし、たとえば地域伝来のもの、あるいは郷土作家の作品などの収蔵品の充実や、独自の展示方式を工夫するようになった。（中略）鑑賞する人々が各地の博物館等を多く巡覧して、それぞれの特性にふれ、（中略）観光効果を得るといふ観光行動が広がってきた。各地で『博物館・美術館めぐり』という観光行動が普及してきた¹⁹という、幅広い「学習型観光」へのニーズと地域の特色ある展示につながっていく環境づくりの活動動向を示しているのである。

本稿は、上記の観光動向の研究に、観光地づくりの根底にある「観光からのまちづくり」と「まちづくりからの観光振興」²⁰（阿比留 2010）の考え方を継承しつつ、キーワードを「交流すること」と「心のふれあい」とし、文学館の役割に結び付けて探る。作家と文学館、文

学館と地域づくり、地域づくりと作家の課題に立脚し、このような問題意識を出発点として文学館は地域づくりにどのような役割を果たすのかについて検証する。

そこで、金沢市内の泉鏡花、徳田秋声、室生犀星の各々の記念館の事例研究を展開し、文学館と地域づくりとの関係はどのようなものなのか、文学芸術活動の拠点施設の設置はどんな意味があるのか、さらに、文学館と地域づくりの相互生成はどのように体现していくのかということをも明らかにする。

以下では、まず、具体的に金沢市にある泉鏡花記念館（1999年）、室生犀星記念館（2002年）、徳田秋聲記念館（2005年）を取り上げ、地域文化と作家の生成に、文学館の設立する営為自身に意味があることを検討する。次に、文学館の生成は、能動的に故郷へ反哺²¹（恩返し）すること、また、文学精神の継承は地域づくりの精神風土に貢献していくという、文学館の「内発型のものとなる²²」地域づくりの取り組みを考察する。

I 文学館のまちづくりにおける役割

文学館は「文学を通じて学び合いの場」、「相互の交流の場」、「教育・研究拠点としての場」、「作品を底流する作家の精神」（坂口安吾）の掘り起こしの「場」、さらに、一連の文学資源の意味が再発見される「場」としての文学館の本質的な価値を探ることこそが本研究の一つの目的である。そこは、「文学と文学が生まれる場所の関係と精神的なものの共感を呼び起こす」²³「場」となり得よう。同時に、地域文化資源に存在している文学館は地域づくりと関係する。ここに、文学館は来館者との関係で結びつく。来館者、あるいは講座の講師、聴講者の間に生まれた交流は、地域づくりに交流することの重要な部分を構成し保有している。これは文学館と地域づくりの相互生成を持ち得るものである。「伝統文化の継承」および「市民生活の充実」に取り組む作家の記念館や文学館は今までの地域文化振興の一つの核心だと考えられる。文学館の館内施設や活動展開、文学の魅力の情報発信の試みが非常に重要なことと考える。文学館が自主的に探しているものはコミュニティづくりに取り込むことができる。地域は個性的文化の生成、固有の文化を共有する時、文学者と作家はどのような役割を發揮したのか。そして文学館はどのような役割を發揮したのかを検証することが、本研究のもう一つの目的である。

全文協²⁴によると、日本全国には、公立・私立の文学館や文学者の記念館および図書館内の文庫など付帯施設を含め現在その数は663にのぼる。同協議会編『全国文学館ガイド』（2013）に収録された加盟館数は99館、賛助会員は2団体である。石川近代文学館、泉鏡花記念館、徳田秋聲記念館、室生犀星記念館も会員館に入っている。今も読み継がれ愛される作家たちの“生誕の地”に建てられる記念館は、日本情緒あふれる歴史的建築物のある町並みに溶け込んでいる。そこで、町になじんだ特有の建物以外に、地域づくりはどのように文化を融合されているのかを見てみよう。



写真 8-1 石川四高記念館・石川近代文学館の外観
(姜東星撮影 2021年12月11日)

泉鏡花記念館は、鏡花が幼少時代を過ごした生家跡に建つ、1999年11月に開館した。記念館の近くには浅野川²⁵が流れている。鏡花が17歳の上京までこの地で過ごした。鏡花の数々の作品の舞台になったのはこの北陸の特色ある「水」²⁶である。鏡花は「加賀の自然、金沢の天地は...最も私の金沢に或る遣る瀬ない懐かしさを、心の奥に刻んで²⁷」いると述べている。これは、鏡花文学の原風景とも言える。

記念館は「鏡花が生まれ育つ当時の町並みの面影を色濃く残す主計町茶屋街やひがし茶屋街に隣接している²⁸」。「木造建築で黒瓦と格子づくりを基調とした外観は、昔の金沢の風情を残す周辺の街並みに調和して落ち着いた雰囲気を出している²⁹」のである。1999年開館記念の企画展「玉三郎と『天守物語』展³⁰」や「日本橋展³¹」、「鏡花と能楽³²」、「鏡花百物語³³」企画展と特別展示などは89回開催されていた。



写真 8-2 泉鏡花記念館の外観
(姜東星撮影 2021年12月11日)

常設展示室³⁴は、「生涯と作品」「終の棲家―一番町の家」「美と幻想の水脈」「鏡花本の世界」をテーマに自筆資料や初版本や遺愛品を展示するとともに、代表作のジオラマなどを使用して鏡花作品を実際に目や耳で体験するコーナーも備えている。開館 20 周年を迎えた令和元年の 12 月 2 日には、来館者 40 万人を達成した³⁵のである。

記念館は現在も人々に愛されている『義血侠血』『高野聖』『婦系図』『歌行灯』など鏡花の文学の世界の魅力を導くだけではなく、鏡花の独特の美意識への共感を身に近くもたらしていると考えられる。鏡花の独特の美意識については、鏡花を敬愛する谷崎潤一郎が 81 年前の『図書』（1940 年 3 月）に、『鏡花世界』と称するものの中には、（中略）時として神秘で、怪奇で、縹渺としてはあるけれども、本質に於いて、明るく、花やかで、優美で、天真爛漫でさへある。さうして頗る偉とすべきは、而もその世界が純粹に『日本的』であると云う一事である³⁶と語り、鏡花の「著作には新たに歴史的な意義と、古典的な光彩とが加はったと見るべきである」と。さらに、「先生こそは、われわれの国土が生んだ、最もすぐれた、最も郷土的な、わが日本からでなければ出る筈のない特色を持つ作家として、世界に向かって誇つてもよいのではあるまいか」と、題名「純粹に『日本的』な『鏡花世界』」で鏡花を高く評価した。その文豪谷崎が指摘していた「純粹に『日本的』な『鏡花世界』」こそが、鏡花作品の生命を保ち続けている根源的存在である。

徳田秋聲記念館は、浅野川にかかる梅ノ橋のたもとに建てられた。卯辰山のみもとに広がるこの地は、秋聲が幼少期を過ごした場所である。2005 年 4 月に開館した。古都金沢の伝統的な建物群が残る「ひがし茶屋街」とも隣接している。「秋聲も幼少期よりしばしば足を運び、その作風に大きな影響を及ぼした³⁷」郷里の地である。



写真 8-3 徳田秋聲記念館の外観
(姜東星撮影 2021 年 12 月 11 日)

2021 年は徳田秋聲生誕 150 周年の記念年を迎え、記念館は企画展「生誕 150 年記念『俳句と遺墨 vol.2』」³⁸を実施されている。記念館館報『夢香山』12 号（令和 2 年 3 月 31 日発行）

によると、記念館 15 周年前の 2020 年 2 月 9 日に入館者は 15 万人達成したのである。

常設展示室³⁹は、「光を追うて『秋聲と金沢』」という「自伝的小説『光を追うて』を元に、秋聲の生い立ちから小説家になるまでのあゆみと、近代化する金沢の姿をたどる」のである。

また、記念館企画展の充実ぶりが窺える。企画展は開館以来 52 回を実施した。近年の題目を挙げると、「徳田秋聲と桐生悠々—反骨の人⁴⁰」「『あらくれ』と大正デモクラシー⁴¹」「芙美子と秋聲⁴²」「康成、秋聲を読む⁴³」などがある。記念館は企画展に焦点をあてて掘り起こした文学精神、すなわち人間の生を生き抜く精神がまさに「ふるさとづくり」の核心というものである。

抒情詩「ふるさとは遠きにありて思ふもの…⁴⁴」で知られる詩人室生犀星の生家跡に建つ室生犀星記念館は 2002 年 8 月に開館した。「犀星の筆名の由来ともなった犀川が流れ、周辺に古き良き家屋が、当時の趣を残したまま点在している⁴⁵」。犀星が育ったお寺、犀川のほとりに建つ雨宝院など、犀星文学の原点となったところを訪ね歩くこともできる。

犀星は詩集『抒情小曲集』(大正 7) の自序⁴⁶に、少年時代について次のように述べている。

少年時代に感じた季節の^{うつりかはり}変移の鋭い記憶とその感覚の敏活とは、ほんとに何にたとへて言つていいか解らない。まるで「^{さば}触り^{つの}角」のある虫のやうに、いつもひりひりとさとり深い魂を^も有つてゐるものだ。それはまだ^{こども}小児^{とき}時代の純潔や^{えいち}叡智がそのまま温和にふとり育つて、それが正確に保存されてゐるからである。

この詩集の作品の創作地は、「郷里金沢市千日町雨宝院といえる金比羅神社、^{つがえのき}寂しき^{つがえのき}榎の大樹に寺領の四方はとりかこまれ、昼なお暗き前庭のほとりきわめて幽遠なり、その奥の間よりは直ちに犀川をのぞむ。美しき清流寺院の岸を^{あら}灑いて夏といえども涼しきことかぎりなし。川を隔てて^{とむろ}医王、^{ひだ}戸室の山さては遠く^{ひだ}飛驒の連峯をも望むことを得」⁴⁷である。金沢という土地柄の作品を生んだ金沢と犀星とのつながりが深い。



写真 8-4 と 8-5 室生犀星記念館の外観
(姜東星撮影 2021 年 12 月 12 日)

作家の記念館とあわせて、浅野川畔の「鏡花のみち」「秋聲のみち」、犀川岸の「犀星のみち」、金沢ゆかりの文学碑、句碑、鏡花の出生地記念碑、秋聲の詞碑、犀星の詩碑などは重要な文化遺産として大切に受け継がれている。日本で初めて「文学碑」⁴⁸ が立てられたのは1948年（昭和23）11月に金沢市の卯辰山公園に立てられた徳田秋聲文学碑⁴⁹である。

「生きのびて また夏草の 日にしみる」⁵⁰ 徳田秋聲

「はゝこひし 夕山桜 峰の松」⁵¹ 泉 鏡花

「うつくしや 鶯あけの 明星に」⁵² 泉 鏡花

「寒菊を 束ねる人もない冬の日」⁵³ 室生犀星

「竹むらや やゝにしぐるゝ 軒ひさし」⁵⁴ 室生犀星

金沢市内に立てられた句碑は生命と尊厳に対する考えに強い共感を覚え、体と心ともに癒されると言える。「みち」「碑林」という場所の中で生命への深い思考を導いていくことになる。「三文豪をはじめ金沢に刻まれている文学の様々な記憶を自分の足で確認すること⁵⁵」は人々の心にひかれる。さらに、三棟の記念館が「共通しているのは、文学遺産として長く読み継がれてゆく本⁵⁶」に触れる空間だったのである。



写真 8-6 浅野川に架かる浅野川大橋、国の登録有形文化財
川沿いの両岸に「鏡花のみち」「秋聲のみち」
(姜東星撮影 2021年12月11日)



写真 8-7 犀川に架かる犀川大橋、国の登録有形文化財
川沿いの両岸ともに「犀星のみち」
(姜東星撮影 2021年12月12日)

また、金沢市の制定した泉鏡花記念館、徳田秋聲記念館、室生犀星記念館条例⁵⁷によると、郷土が生んだ文豪の泉鏡花、徳田秋聲、室生犀星の「作品や業績を広く市民に伝えるとともに、市民がその文芸作品に親しみ、学ぶことにより、文化の振興に資するため」の記念館を目指して完成したのである。この3棟の館を含め、16件の文化施設⁵⁸は公益財団法人金沢振興財団⁵⁹によって管理運営されている。金沢振興財団は、「金沢市が有する伝統文化の継承と振興を図り、もって、本市における市民生活の充実と文化都市の発展に寄与する」設置の目的は、地域ぐるみの文化、芸術振興の「場」としての機能を果たしていることが窺える。

ここでは、作家の記念館、文学館は地域文化振興の一つの核心となる。それを巡って、文学館と文学散歩、文学碑巡り、句碑巡りは、「文化的な環境をつくり出すこと⁶⁰」と一体的なものになる。然るに、「文学のまちを歩こう」というコンテンツの創出は、現地の歴史、文化、芸術に対する理解を深め、金沢への郷土愛の形成には、その目に見えない故郷への誇りと愛着が育まれている。それは、金沢文化、さらに「日本の文化を再認識することにも⁶¹」深くつながっていると考えられる。

そこで以下では、上記の3棟の館の設立、館内設置、常設展、企画展の主題を通して文学館という「場」で触れる鏡花文学、秋聲文学、犀星文学の文学世界が、生まれ育ちの金沢とどのような関係があるのかという点と、出生地、地理環境、民俗、風俗、風土など、「その土地の持つ記憶⁶²」について、彼らの感情を含め、各自の作品の作風を築き上げ変化をもたらしたにも関わらず、これらの故郷金沢に関する共通認識は作家たちの文学作品の中でどのように表現していくのかという点、すなわち、金沢はどのように郷土作家を生成するのかということの論を進める。作家は、逆にどのようなものを故郷金沢に誇りを持たせるのかという文脈の中で文学館研究を通して見てみよう。

II 文学館は地域の精神性を紡ぎ出し

まず第一に、文学館を設立するという営為は、作家の地域に対する影響を定着させる役割を担っていることが窺える。文学館は作家の郷土記憶を地域に深く入り込ませ、文学に親しみ、人々の心の中に根強く入り込んだ役割を果たしているのである。作家と故郷との関係は文学館を通じて相互に結び合っている。文学館は作家に故郷に対する反哺を形成させることが主動的な反哺と言えよう。読まれている文学作品を共に共有する文学館は、地域の精神性への掘り起こしの一つのつなぎとして、能動的に地域に対する反哺をしていると考えられるからである。

1. 泉鏡花記念館

泉鏡花記念館は、「文学、演劇、映画そして現代アートやサブカルチャーなど、ジャンルを超えて広がり続ける泉鏡花の世界⁶³」と、その魅力を紹介している。企画展「泉鏡花×金井田英津子『絵本の春』原画展」、「鏡花と能楽」展、「鏡花玄妖アンソロジー」展などにおける鏡花の自筆原稿、自筆草双紙目録、岩波書店「鏡花全集」（第1-28巻、別巻、出版年月日1940-1942）など貴重な資料の数々が展示されている。また、「鏡花と楽しむ」連続講座、「旅と俳句」「旅と鏡花と衛生」など多数のイベントが開催されている。

泉鏡花記念館には鏡花の貴重な遺品になる摩耶夫人像がある。鏡花は、1873年に石川金沢市の彫金師の家に生まれる。母すゞ⁶⁴は「江戸生まれ、加賀藩お抱えの能楽の大鼓師の娘、宝生流シテ方松本金太郎の小妹であった」。鏡花は能と深いかわりの中で育った。しかし幼い頃に母（享年28）を亡くし、2人の妹は養女として家を出ることに。亡母憧憬や家族への愛惜は作品の基底になり作風に反映されている。鏡花自筆の「年譜」にはこう記されている。

明治17年6月、父にともなはれて、石川郡松任、成の摩耶夫人に詣づ。逕の流に合歡の花咲き、池に杜若紫なり。なき母を思ひ慕ふ念いよよ深し⁶⁵。

この行善寺を参詣して以来、釈迦の生母である摩耶夫人像を信仰した鏡花。その後金沢の仏師に小さな摩耶夫人像を誂え、机上に置いて、毎日拝んだという、その経緯をもとに発表した短編小説『夫人利生記』（1924）では、主人公の男に「（摩耶夫人像は）夢にも忘れまじき、亡き母の面影」と語らせている。記念館のこの摩耶夫人像は、「鏡花が亡くなるその日まで、書齋でその執筆を守り続けた」象徴とも言える。鏡花文学の母親の主題について、作家・評論家種村季弘は「故郷の風景、一番そこにある母親、それをもう一度、そういう異郷の、東京の風景を集めることで、そこに、母親の記憶を復元している。川を遡ることは、時間を遡ることとなる。そして、自分の懐かしい人々と再び会えるというような、そういうコンテキストに繋がっていくだと思ふ⁶⁶」ことを指摘している。

1895年（明治28）～1900年（明治33）文学年表のこの時期の鏡花の作品は、「母性思慕を変奏する『照葉狂言』（明治29）や異世界というべき山中での神秘妖艶な魔性の女との出会いを描く『高野聖』（明治33）などをはじめ、平板な写実では捕捉し得ない世界を切り開いていった⁶⁷」という「唯美、幻想的な小説空間の造立⁶⁸」の特徴は、能とのかかわりも色濃く影響している。そこは、「金沢の文化を象徴するともいえる能楽を例にとっても、明治になつてなお卯辰観音院の神事能（4月1日・2日）、鏡花が幼い頃の遊び場であった久保市乙剣宮においてはまた奉納囃子が行われている。（中略）『あそびなかまの暮ごとに集ひしは』、『県社乙剣の宮の境内なる御影石の鳥居のなかなり。いと広くて地をば綺麗に掃いたり、榊五六本、秋は木犀の薫みたり。百日紅あり、花桐あり、また常盤木^{つち}あり⁶⁹』（明29・11～12『照葉狂言』）」とある。このような鏡花文学と深く結びついていった、季節ごとに变化する金沢の自然や風景、金沢人の生き方や暮らし方を読書で心を打つ美しさがあり、追体験できると考えられている。

泉鏡花記念館には、鏡花の戯曲を原作とした映画作品も紹介されている。「夜叉ヶ池⁷⁰」の夜叉ヶ池は龍神伝説を題材にしている。「夜叉ヶ池」を映画化した篠田正浩と「草迷宮」を映画化した寺山修司が鏡花の魅力を語っていた対談『鏡花の映像化をめぐる⁷¹』（1991）の中では、篠田正浩は鏡花が「なぜこんなに神秘的で、荒唐無稽な、魑魅魍魎の出でくる作品を書き続けたか」と分析し、「単なる彼の幻想性によって引き起こされただけではなく、鏡花の目の前にある文明が、魂を轢断してゆくことに対する拒絶があったからだ」と述べている。また、泉鏡花は「日本で最初のカウンター・カルチュアの作家⁷²」だと指摘している。映画という文学と異なる媒体の影響力は鏡花文学の影響力があることの一つの証左とも言えよう。このように、映画の表現形式を媒介することで鏡花文学への理解を促すことに繋がる。

2. 徳田秋聲記念館

徳田秋聲記念館は、「秋聲を記念、顕彰するとともに、その作品とゆかりの品々を収集、保存、展示することで、その生涯と文学的業績を多角的に紹介し、秋聲文学の豊かな世界に親しんでいただく」設立目的を果たしてきた。平成18年八木書店版『徳田秋聲全集』全42巻別巻1全集完結しての第38回企画展⁷³、「兼六園、金沢城、ひがし茶屋街、浅野川——春夏秋冬さまざまな表情を見せるこの街の景色」の思いを探る「秋聲の描く風土、金沢」展⁷⁴、企画展『『秋聲と二つの金沢』—『挿話』／『町の踊り場』⁷⁵』、「秋聲のはなやかな交流展～漱石・龍之介の書簡を中心に～⁷⁶」、「自伝小説に描かれた金沢⁷⁷」等の展示会を通じて、金沢への愛着を深める「場」をつくり上げていく。



写真 8-8 兼六園の雪吊りの景観
(姜東星撮影 2021年12月11日)

徳田秋聲記念館報『夢香山』によると、記念館は多くの市民が来場した企画展記念講演、文学講座、連続講座を行い、毎年恒例の呈茶会「桜の季節のおもてなし」、「秋聲作品の朗読会」、「秋聲とお座敷あそび」⁷⁸（秋聲ゆかりの「ひがし茶屋街」の芸妓さんの芸を間近に体験する催し）、金沢学院大学の学生たちによる企画「徳田秋聲読書会」、金沢ナイトミュージアムの一環として夜間に行ったトークイベント「古書店夜話」⁷⁹、演奏会、「秋聲誕生会 2019/レコード鑑賞会」、秋聲を偲ぶ「秋聲忌」、古本市（絶版の相次ぐ秋聲作品をはじめ、犀星、鏡花、同時代作家ほか、金沢の歴史や文化にまつわる本を集めた）などを開催し、また、金沢市立玉川図書館と三文豪記念館との連携事業である「出張図書館『見る・聞く・読む秋聲』」⁸⁰ という企画は、「文学館の展示で作品を紹介する最終目的は、実際に本を手に取り読んでいただくこと」の文学館の核となる役割を果たしている取り組みと言える。

秋聲記念館は、「東京都文京区本郷に現存する秋聲旧宅の書斎が忠実に再現されている。居宅は現在、東京都の史跡に指定されている。（中略）秋聲愛用の文具、座布団、屑入れ、飾り棚などを当時の雰囲気のままに配置」⁸¹ された「書斎」とは、「作家にとって、書物から知識を吸収し、作品を生み出してゆく場所（トポス）である。よってそこは作家の思想そのものが凝縮された濃密な空間、小さな宇宙と言えるであろう」⁸² と徳田秋聲の世界観を探っている。

3. 室生犀星記念館

室生犀星記念館は、「犀星の生き方やその文学世界の魅力と出会い、ふるさとや命に対する慈しみの心への強い共感呼び起こしていただけるもの」⁸³ 考えている郷土文学館である。館内は犀星の自筆原稿や書簡など「生涯と作品・交友と人柄」を多面的に紹介している。「犀星がこよなく愛した庭を現代風にアレンジし、庭石、犀川の流れをイメージした池を二つの庭に配した」のである。「音で聴く犀星の世界」では「朗読をきく」「歌をきく」から選んで聴くことができる。「校歌をきく」に犀星作詞の校歌全 27 曲を収録している。校歌による地域文化の伝承に寄与しているのである。

以下に、記念館におけるこれまでの企画展の情報⁸⁴を列挙する。生誕 130 周年記念犀星文学の出発点でもあった俳句への思いが込められた「第 51 回 犀星発句道」展⁸⁵によると、「犀星にとって俳句とは、文学への導きを与え、鍛え上げてくれた、大切な『文学的ふるさと』（『発句道の人々』）」であった。

「第 17 回 犀星が描いた金沢—ふるさとを思う—」展⁸⁶は、「犀星ゆかりの地である千日町をはじめ雨宝院、犀川、野町小学校、金沢地方裁判所、金石、兼六園、川岸町（幸町）、天徳院、医王山、野田山を舞台にした作品を紹介」した。また、犀星の『動物詩集』序詩には「生きもののいのちをとらば 生きものはかなしかるらん。生きものをかなしがらすな。生きもののいのちをとるな」という子どもに向けて書いた強いメッセージが溢れている。常に命を見つめ、美しく暖かな犀星の作品世界の「命の息吹を感じる喜び」を共感する。また、「古き世の 顔も匂ふや 松の内」は犀星にとっての「古き都」の哈爾濱であり、「犀星の詩心を刺激し、後年『哈爾濱詩集』となる抒情詩の数々を産ませた」のである。

「第 43 回 犀星歳時記～秋冬編～」展⁸⁷は、「石垣に 冬すみれ咲き 別れけり」という犀星の句について「金沢のあちこちに残る石垣は、小さな生き物の宝庫。日当たりのよい場所には冬でも草が生えていることがあると犀星は言います。（中略）四季折々の心に触れた行事や風物を、作品や日記、手紙にあふれるほど記しています。虫の声、獅子舞、茸狩り、しぐれ、かぼちゃ、冬すみれ、門松、お買初、七草粥、節分…」と紹介している。

「第 49 回 犀星の詩集」展⁸⁸は、犀星が生前に出版した詩集 24 冊を紹介し、犀星の詩作の発表数は 2,000 編以上にも及ぶ。「生涯をかけて打ち込んだ詩作とは、犀星にとって、大切に守るべき魂のようなもので、生きるとは何かを問い続けることでもあった」のである。

以上のように、鏡花記念館、秋聲記念館、犀星記念館を事例対象として展開されている文学活動を示した。貴重な文化的資源として共有化され、地域の新たな交流を生み出している。文学館は地域づくりの一端を担うと言う点で重要な構成部分であり、これはまさに地域づくりにおける文学館の役割と言えよう。文学館が主催する企画展、多くの文学講座、イベントを実施する着眼点は、泉鏡花、徳田秋聲、室生犀星の魂が甦るもの、「そのすべてが金沢の風土に深く根ざし」、「愛を感じ取る」「いのちへのまなざし」の視点に向けて、文学館には重要なことであり、これはコミュニティの精神的な意味合いを掘り起こしたものであると考えられる。文学館は作家の文学精神の掘り起こしたこと、これこそが地域づくりに内包している精神性への掘り起こしであり、地域づくりの一つの核心である。文学館の文学者を読みとく取り組みは、心の拠り所となる地域づくりの精神を体現しているのである。

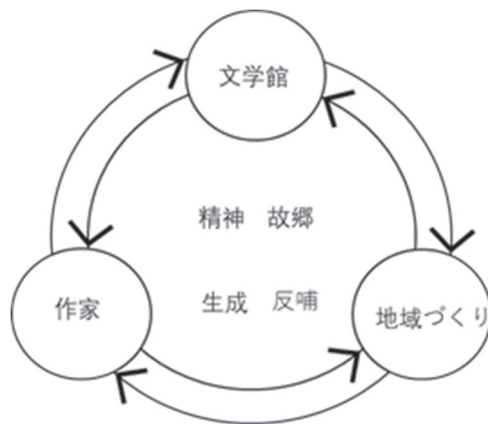
一方、金沢三文豪記念館を含め現在 16 箇所の金沢市文化施設との共通観覧券がある。この 1 枚で金沢市の文化施設巡り⁸⁹ができる取り組みは、地域づくりの連携体制が培われている。また、「金沢の歴史や文化を学び、ふるさとへの愛着と誇りを再認識する」という趣旨の「金沢検定」を主催する認証機関がある。2005 年第 1 回「金沢検定」を実施以来、「金沢検定」に向け、金沢三大文豪の各記念館を巡り、学習に励む金沢市民が増えている。（中略）金沢検定を

通じ、ふるさと教育が拡がりを見せている。(中略)各館共通の年間パスポートで何回も足を運ぶ受験生もいるという⁹⁰⁾『富山新聞』の記事を紹介する事例もある。また、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、令和3年7月31日(土)から9月30日(日)まで休館しているが、公式サイトや館報、Youtube、ブログ、「友の会」「犀星つうしん」など、多くの媒体を活用して広く記念館の活動にふれられる。文学館の独自の情報を発信していること、情報提供の媒体を活用することが来訪を促していくことも重要である。

Ⅲ 文学館の存在による作家の故郷に対する反哺

本稿のねらいは、地域文化と作家の生成に、文学館の設立する営為自体に意味があることを検討することである。そこで、文学館の生成は、能動的に故郷へ反哺すること、また、文学精神の継承は地域づくりの精神風土に貢献していくという、文学館の「内発型のものとなる」地域づくりの取り組みを明らかにすることが本研究において目指しているものである。

文学館の作り方、立地、どのように地域の歴史、文化、風俗等に繋げるのか。文学館の役割は大事なテーマである。文学作品を絡めて関連して地域づくりに非常に大事な部分である。作品舞台を地域づくりにかかわるところ、作家を含め、地域にかかわる関係作品ばかりではなく、精神性と地域文化振興は直接間接的に、地域の独自性としての「光」を見る大きな捉え方として、今日的意義を解釈する。



『群像 日本の作家5 泉鏡花』の同時代評に、夏目漱石が「銀短冊」―「近作短評」より次のように述べている。

鏡花君の「銀短冊」は草双紙時代の思想と明治時代の思想とを綴ぎはぎしたやうだ。夢幻ならば夢幻で面白い。明治の空気を呼吸したものなら、また其空気を写したので面白い。唯綴ぎはぎものでは纏つた興味が起らない。然し確かに天才だ。一句々々の妙はい

ふべからざるものがある。古沼の飽くまで錆にふりたものだと見たものが、鯰の群で蠢動めいてゐるなどは余程の奇想だ。若しこの人が解脱したなら、恐らく天下一品だらう。
(1905・5、「新潮」初出)

また、徳田秋聲は泉鏡花の文学について出世作『滝の白糸』や『化銀杏』『外科室』などの作品は、「其処に現はれた人間観や女性観や恋愛観が『高野聖』に至つて最も完全な芸術的表現となつてゐる」⁹¹ (1935・12、『文芸春秋』初出)と指摘している。「要するにさう言つた庶民的な反抗感情の無意識的な現はれであらうが、それが大抵の場合女性を対象としてゐるのである」⁹²。その「犀利な洞察があつて、誰も気づかないやうな人間の裏面が直ぐに感づける。(中略)鏡花君の皮肉な口の端にかゝると、何んなに威張つてゐる男でも忽ち尻尾を掴まれてしまふ」⁹³という尖鋭さを述べている。それは鏡花文学に敬意を払うもの、「時代に取り残された芸術でも、その質によっては相当永いあひだ、事によると永久に其の信者を失はない一つの著るしい例証であるが、それも詮ずるところ、各時代共通の悩みがそこにあるからではないだらうか」⁹⁴という鏡花文学の根本的な出発点を明らかにしている。

坪内祐三、荒川洋治編(2002)『明治の文学 第9巻 徳田秋聲』には、徳田秋聲は「自己を意識する読書」(明治45年4月1日「雄弁」)の中に「団体旅行等には交はるよりは、唯の一人で、行きたいところに行き、止まりたい時に止まると言ふ自由な旅行の方が、山や川に親しむ事も多く、且又、自分と周囲の物との関係が明白となり、従つて、『自己』を意識する事も一層強くなるものである。」⁹⁵と書いている。秋聲⁹⁶は「見えぬ所、わからぬ奥」(明治41年3月1日『早稲田文学』)について、次のように述べている。

森には、樹や草や花や葉と云ふ^い形^{けいしやう}象^{あきら}の明^{ほか}かなもの^すの外に、奥深い、暗い、見え透かない、森そのものの藏したサムシングがある。而かも、ここの物象^{ぶつしやう}よりは、この深く藏されたサムシングの方が、森そのものにとつては、大切な生命だ。この奥深いサムシング、それを僕は書きたいと思ふ。(中略)その見えない奥、わからない味、さながらに書き表はして見たいと云ふのが、僕の希望です。(中略)僕の人生^{ぼく}に対する態度もこれです。

それは、「かやうに心に余裕が生じ、周囲の圧迫から脱れた読書をする時には総べて自分の思想感情が中心となつて来るから、勢ひ、『自己』と『書物』と、『自己』と『外界の万象』との対象が明らかになつて来る。この時に於いて、最も鮮やかに、『自己』なるものゝ影を、客観的に眺める事が出来るのである」⁹⁷秋聲文学の生命に対する考え方、生き方の礎となるものが考えさせられている。

室生犀星は、1889年(明治22)に金沢市裏千日町に生まれ、生まれてまもなく近所にあつた真言宗の寺院雨宝院の住職室生真乗とその内縁の妻赤井ハツにもらわれ育てられる。7歳の時室生家の養子になる。雨宝院には犀星が愛した杏子の木や紅葉などが今も残っている。

杏子の木は樹齡 130 年。15 歳の時『北國新聞』（1904 年 10 月 8 日版）に初めて俳句「水郭の一林紅し夕紅葉 照文」が掲載された。二十歳で上京、詩人として頭角を現し始めたのは 1912 年頃。翌年、24 歳頃には北原白秋の雑誌『朱鸞』への寄稿を果たす。ここに収められたのが「ふるさととは遠きにありて思ふもの」で『小景異情 その二』である。犀星の故郷への複雑な思いが吐露されている。

「ふるさととは遠きにありて思ふもの そして悲しくうたふもの よしや うらぶれて異土の^{かたみ}乞食となるとても 帰るところにあるまじや ひとり都のゆふぐれに ふるさとおもひ涙ぐむ そのころもて 遠きみやこにかへらばや 遠きみやこにかへらばや」⁹⁸
（『小景異情 その二』）

「犀星の本当の『ふるさと』とはどこなのだろうか。」「犀星にとって、どんな場所であったのだろうか」⁹⁹ という詩人井坂洋子の問いかけは、犀星文学における「ふるさと」のメタファーと重なっている。芥川賞作家・比較文学者である小野正嗣（2016）は、「故郷は、そこから離れた場所でしか見つからない」¹⁰⁰ と捉えている。ここでは、故郷探しは語りの媒介であり、故郷は書くことの中にしかないことが窺える。中国人作家、ノーベル文学賞作家の莫言は『故郷を越える』¹⁰¹ では、「故郷の風景」についてこのように書いてある。「故郷の風景はなぜ靈性に富んで魅力的なのか、主な原因は、故郷の景色に少年時代があるのである。（中略）私の少年時代は暗黒で、恐怖と飢餓は成長に伴い、このような少年時代は、作家になった一つの重要な原因であろう。このような少年時代は、故郷と切っても切れない関係を作ったのである。故郷の山と川、動物と植物はすべて少年時代の感情に染み込んで濃厚な感情の色を身に付けてきた。多くの後の友達は忘れたが、故郷のことはすべてが忘れられない。（中略）現代小説家の作品には、大自然は魂があり、すべてに魂が宿っている。この万物の靈を通して感情は、主に少年時代の故郷によって育成してきたのである」という精神的なものの故郷がまさに莫言の心の支えと精神的支柱となっていたものだろう。

むすび

阿比留勝利（2010）は『『観光』には国の光を『みる』と『しめす』の両義性がある。『みる』からすると地域は観光に活用される対象となる。『しめす』からすると、『地域の光を「しめ」し、その光を「みる」ために人々が来訪する』一連の発信と交流の意味を表現し、『まちづくり』と通底してくる』¹⁰² と指摘している。“地域づくり＝観光地づくり”に地域独自性としての「光」は有形と無形のものがある。発信力と交流の契機をつくるうえでのまちづくりと文学館は、人間に直接的により深くインパクトを与える。

文学館の社会的意義がある。外に住んでいる人たちとの接触、文学館と住民との接触する

「場」としての意味が深い。そこに住んでいる人たちは文化を育んでいく。まちのことを改めて学び、住んでいる人たちの今の生活の豊かさがある、蓄積して創り出す価値観、それ自体としての魅力がある。そういうものに直接的間接的に文学館はインパクトがある。くり返しになるが、文学館の持つ意味は広い意味で生活の中に文化定着として、一つの要素として形成されたのである。そういう創られたもの、地域の独自性を内外に発信しつつ継承され、地域の文化に刺激、それらの要因で反映されたものは地域の光と魅力であることが強調されなければならない。このように、文学館は金沢市の「光」を示していることが明らかになる。一方、文学が見えないもの、「かげ」のものが見えるように、その「見えない見知らぬものこそ、私たちのもとにそうした言葉や間を置き忘れていった未来にほかならない¹⁰³」ことを示しているのである。

金沢の精神風土は文学作品の中で作家を形成した。逆にこの作家も「故郷」を形成させた。つまり、互いに生成した。文学館は作家に故郷の影響を与えている「場」である。今日にあって、文学資源の要素の考えは重要である。文学館は地域づくりの一つとしても重要な場所であり、文学館の利用、文学資源の活用、文学資源を地域づくりに応用する課題はさらに相互生成の視点から広く考察する必要がある。日本全国に文学館は多々ある。文学館の研究はまた稿をあらためて論じることにはしたい。

【注・参考文献】

- 1 野田邦弘 (2014) 『文化政策の展開—アーツ・マネジメントと創造都市』学芸出版社、157 頁
- 2 本康宏史、東四柳史明、橋本哲哉、河村好光、高沢裕一 (2013) 『石川県の歴史』山川出版社、7 頁
- 3 淡交社編集局編 (1999) 『日本の文学館百五十選』淡交社、93 頁
- 4 旧制第四高等学校は、1887 年 (明治 20 年) 4 月金沢市に設立された官立旧制高等学校。略称は「四高 (しこう)」。昭和 44 年に国の重要文化財に指定された。四高本館であった建物は、近代日本の高等教育機関の黎明を今に伝える全国でも数少ない建造物として貴重である。
URL:<https://ja.wikipedia.org/wiki/> (参照日 : 2022 年 1 月 8 日)
- 5 同上。石川近代文学館は昭和 43 年に設立され、日本近代文学館に次ぐもので、地方では最も早い開館であると。テーマ別に 11 に区分された展示室の中で、師尾崎紅葉の添削の跡が残る鏡花の「義血侠血」の原稿、北原白秋、萩原朔太郎らの自筆の序もある犀星の「愛の詩集」の原稿、そして秋聲の「仮想人物」の冒頭に描かれているサンタクロースの面などが貴重な展示品がある。
- 6 全国文学館協議会編 (2013) 『全国文学館ガイド 増補改訂版』小学館、26 頁
- 7 社団法人日本観光協会編 (1985) 『観光地づくりの道標II—地域ぐるみの活性化方策』丸井工文社、25 頁
- 8 同上、41 頁
- 9 同上、42 頁
- 10 井口貢 (2008) 『観光学への扉』学芸出版社、174 頁、木下達文「地域まるごと博物館 (フィールド

ミュージアム・エコミュージアム等)」。

- 11 中村稔 (2011)『文学館を考える』青土社、19 頁
- 12 同上、24 頁
- 13 岡野裕行 (2008)「文学館研究の転換期—全国文学館協議会の発足と文献数・文献内容の変化—」日本図書館情報学会誌、Vol.54,No.4, Dec. 2008
- 14 全国文学館協議会設立までの歩み：1994 年 6 月 15 日、日本近代文学館の呼びかけで、各地の文学館・記念館の代表者の初めての集まりとなる「文学館懇談会」が開かれた。1994 年 10 月 27 日の第 2 回目の協議会準備会をへて、1995 年 6 月 17 日、全国各地の文学館・記念館に広く参加を呼びかけ、49 館 67 名の出席を得て総会を開催、協議会が正式に発足した。当該協議会は、「文学館相互の交流を目指し、1995 年に発足した相互扶助団体で、会員館は 2021 年現在で 104 館」がある。現在公益財団法人全国文学館協議会の事務局は日本近代文学館内に設立している。
全国文学館協議会公式サイト (参照日：2021 年 9 月 5 日)
- 15 国土交通省「観光立国推進基本計画 2012」
URL:<https://www.mlit.go.jp/common/000208713.pdf> (参照日：2021 年 9 月 5 日)
- 16 同上。
- 17 須田寛 (2009)『観光～新しい地域づくり～』学芸出版社、131 頁
- 18 井口貢 (2008) 前掲書、165 頁。「博物館とは、歴史館、美術館、科学館、郷土館、文学館、記念館のみならず、動物園、水族館、植物園、昆虫館なども包含する非常に広い概念を指している」。日本における博物館の総数は約 5600 館もある。
- 19 須田寛 (2009) 前掲書、132 頁
- 20 阿比留勝利 (2010)「まちづくりからの観光振興 —参画と協働によるコミュニティの文化開発からの接近—」『城西国際大学紀要』第 18 巻第 6 号、1 頁。「本稿では、今後の観光地づくりの基本コンセプトをニューツーリズムに対応する観光まちづくりととらえ、その進行方法を『観光からのまちづくり』と『まちづくりからの観光振興』の合わせ技として提起した」のである。同上、16 頁
- 21 中国明代に編纂された『増広賢文』にあることわざ。「慈烏反哺」の「慈烏」は烏の異称。類義のことわざ「鳩に三枝の礼あり、烏に反哺の孝あり」である。三省堂編修所編 (2014)『新明解故事ことわざ辞典』509 頁。「鳩は親がとまっている枝より三枝下にとまり、烏は自分がひなのときに養われた恩返しに、年とった親の口にえさを含ませてやるということから」である。
- 22 野田邦弘 (2014) 前掲書、221 頁
- 23 筆者 (2021) 研究ノート「文学が促す温泉のまちづくり—『城の崎にて』の精神性を掘り起こす」『城西国際大学紀要』第 29 巻第 6 号城西国際大学、68 頁
- 24 全国文学館協議会公式サイト
URL:<https://www.bungakukan.or.jp/zenbunkyo/history/> (参照日：2021 年 9 月 5 日)
- 25 友禅流しが行われる浅野川。「此の川は水が柔らかうて、蒼い瀬も、柳の葉の流れるやうだで、俗に女川と」(泉鏡花、大 8.1~10・2『由縁の女』)と呼ばれていた浅野川。小林輝治 (1992)「鏡花の原

- 風景行一金沢・松任・辰口、春日野』『群像 日本の作家 5 泉鏡花』小学館、170 頁。
- 26 新潮日本文学アルバム（1985）『泉鏡花』新潮社、3 頁
- 27 同上。（「自然と民謡に」大正 4 年）語っている。
- 28 作家記念館研究会編（2019）『全国作家記念館ガイド』山川出版社、117 頁
- 29 全国文学館協議会編（2013）前掲書、148 頁
- 30 開館記念特別企画展（1999 年 11 月 14 日～2000 年 5 月 14 日）
- 31 会期：2002 年 5 月 19 日～8 月 31 日
- 32 会期：2010 年 6 月 4 日～8 月 6 日
- 33 会期：2019 年 11 月 16 日～2020 年 5 月 10 日
- 34 泉鏡花記念館公式サイト
URL：<https://www.kanazawa-museum.jp/kyoka/index2.html>（参照日：2021 年 8 月 24 日）
- 35 「鏡花 雪うさぎ」（2019）、泉鏡花記念館秋山稔館長『開館 20 周年を迎えて—初心を振り返る—』より
- 36 津島佑子・他著（1992）「パリの泉鏡花」『群像 日本の作家 5 泉鏡花』小学館、14 頁
（1940 年 3 月、「図書」初出 1960 年、中央公論社刊『谷崎潤一郎全集』第 22 巻所収）
- 37 全国文学館協議会編（2013）前掲書、150 頁
- 38 会期：令和 3 年 8 月 4 日（水）～11 月 7 日（日）秋聲自筆をはじめ、東京都文京区に現存する秋聲旧宅から新たに発見された 50 点の俳句短冊が初公開されている。
- 39 徳田秋聲記念館公式サイト
URL:<https://www.kanazawa-museum.jp/shusei/index.html>（参照日：2021 年 8 月 24 日）
- 40 第 22 回企画展 秋聲没後 70 周年記念（2011 年 7 月 31 日～11 月 25 日）
- 41 第 23 回企画展 秋聲生誕 140 周年記念（2011 年 12 月 3 日～2012 年 3 月 18 日）
- 42 第 34 回企画展 開館 10 周年記念企画展（2015 年 8 月 8 日～2015 年 11 月 30 日）
- 43 第 37 回企画展（2016 年 7 月 24 日～10 月 29 日）。昭和 22 年 11 月 17 日に行われた秋聲文学碑除幕式前夜記念講演会で、川端康成は「日本の小説は源氏にはじまって西鶴に飛び、西鶴から秋聲に飛ぶ」との言葉を残した。
- 44 伊藤信吉・伊藤整・井上靖・山本健吉編（1968）『日本の詩歌 15 室生犀星』（中公文庫）中央公論社、14 頁
- 45 作家記念館研究会編（2019）前掲書、118 頁
- 46 『日本の詩歌 15 室生犀星』（1968）前掲書、9 頁
- 47 同上、8 頁
- 48 金沢市卯辰山頂上望湖台に建つ秋聲文学碑。昭和 22 年 11 月。宮澤康造、本城靖編（1998）『全国文学碑総覧』日外アソシエーツ、13 頁。秋聲を讃えていた同郷の室生犀星の自筆による秋聲年譜と秋聲直筆の書が秋聲文学碑のそばにある九谷陶板に書かれている。「書を読まざること三日、面に垢を生ずるとか、昔の聖は言ったが、讀めば讀むほど垢のたまることもある。体験が人間に取って何よりの修養だと云ふことも言はれるが、これも当てにならない。むしろ書物や体験を絶えず片端から切拂

い切拂いするところに人の真実が研かれる」のである。

- 49 現在、金沢市卯辰山には 60 を超える記念碑が林立している。碑林公園とも呼ばれた。
- 50 宮澤康造、本城靖編（1998）前掲書、371 頁
- 51 金沢市卯辰山帰厚坂に建つ鏡花句碑（昭和 22 年 7 月）。同上、371 頁
- 52 金沢市尾張町二丁目久保市乙剣宮に建つ鏡花句碑（昭和 39 年 9 月）。同上、374 頁
- 53 金沢市金石北一丁目宗源寺に建つ犀星句碑（昭和 51 年 5 月）。同上、373 頁
- 54 金沢市浅野本町一丁目浅野神社に建つ犀星句碑（昭和 51 年 5 月）。同上、374 頁
- 55 ハイルド・マイヤー（2017）徳田秋聲記念館館報『夢香山』第 9 号（平成 29 年 3 月 20 日発行）、1 頁
- 56 小川洋子（2009）『心と響き合う読書案内』PHP 研究所、4 頁
- 57 泉鏡花記念館条例（1999）、徳田秋聲記念館条例（2004）、室生犀星記念館条例（2002）
- 58 金沢市立安江金箔工芸館、金沢市立中村記念美術館、金沢湯涌夢二館、金沢蓄音器館、前田土佐守家資料館、寺島蔵人邸、金沢市老舗記念館、金沢くらしの博物館、泉鏡花記念館、徳田秋聲記念館、室生犀星記念館、金沢文芸館、金沢ふるさと偉人館、金沢湯涌江戸村、鈴木大拙館、谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館である。
- 59 公益財団法人金沢振興財団公式サイト
URL:<https://www.kanazawa-museum.jp/about/index.html>（参照日：2021 年 9 月 5 日）
- 60 社団法人日本観光協会編（1985）前掲書、25 頁
- 61 ハイルド・マイヤー（2017）前掲書、1 頁
- 62 津島佑子・他著（1992）前掲書、6 頁
- 63 泉鏡花記念館公式サイト（参照日：2021 年 8 月 24 日）
- 64 新潮日本文学アルバム（1985）『泉鏡花』新潮社、7 頁
- 65 同上、13 頁
- 66 泉鏡花記念館ミニシアターにおける種村季弘によるインタビュー「鏡花の魅力」より。
- 67 新潮日本文学アルバム別巻 1（1986）『明治文学アルバム』新潮社、72 頁
- 68 同上、112 頁
- 69 津島佑子・他著（1992）前掲書、170～171 頁。
- 70 「夜叉ヶ池」（1979 年製作）。女形の坂東玉三郎が初めて映画に出演し、村で暮らす女性百合と夜叉ヶ池の竜神白雪姫の 1 人 2 役に挑んだことで当時大きな話題を呼んだ。2020 年、松竹映画 100 周年記念プロジェクトの締めくくりとして、1979 年公開された篠田正浩監督、坂東玉三郎（5 代目）主演作品「夜叉ヶ池」を 4K デジタルリマスター版で 42 年ぶりによみがえらせた。2021 年 7 月篠田正浩監督生誕 90 周年記念放送作品。
- 71 河出書房新社編集部編（1991）『新文芸読本 泉鏡花』河出書房新社、191 頁
- 72 同上、191 頁。「countercultur 対抗文化。ベトナム反戦運動とアナーキーな若者文化との交点に成立した、アメリカ的な既存の文化・価値体系を否定する思想、ライフスタイルをいう」のである。
- 73 会期：2016 年 7 月 24 日（日）～ 2016 年 10 月 29 日（土）

- 74 会期：2015年12月5日（土）～2016年3月21日（月）
- 75 会期：2005年8月8日（月）～11月6日（日）
- 76 会期：2005年4月7日（木）～7月31日（日）
- 77 会期：2006年9月10日（日）～2007年1月21日（日）第6回企画展のチラシによる開催趣旨は下記のように紹介している。「『光を追うて』は昭和13年、『婦人之友』誌上に発表された徳田秋聲の自伝小説です。そこには没落士族の家に生を受けた秋聲（作中名『向山等』）が、近代化の波にさらされる金沢の街で成長し、やがて上京の後、苦難を乗り越えて作家として立っていくまでが情感豊かに描かれています。本企画展ではこのうち秋聲の幼少期から最初の上京までに焦点を当て、ゆかりの資料の数々から秋聲の金沢時代を紹介します。作品の初出誌や初版本はもちろんのこと、徳田家の由緒や肉親との心の交流がわかる手紙の数々、「第四高等学校」時代の成績表や学友からの手紙まで、幅広く展示、また秋聲ゆかりの卯辰山に立つ徳田秋聲文学碑の犀星屏風を初公開いたします」。徳田秋聲記念館公式サイト（参照日：2021年8月24日）
- 78 徳田秋聲記念館館報『夢香山』第11号（平成31年3月31日発行）、6頁
- 79 同上、『夢香山』第12号（令和2年3月31日発行）、6頁
- 80 同上、『夢香山』第10号（平成30年3月31日発行）、7頁
- 81 全国文学館協議会編（2013）前掲書、26頁
- 82 企画展「秋聲の書齋一文豪の小宇宙（ミクロコスモス）―」の紹介による。会期：平成18年2月5日（日）～平成18年5月7日（日）
- 83 室生犀星記念館公式サイト
URL: <https://www.kanazawa-museum.jp/saisei/outline/index.html>（参照日：2021年8月24日）
- 84 同上。
- 85 会期：令和元年7月6日（土）～令和元年11月10日（日）、同上。
- 86 会期：平成19年12月8日（土）～平成20年6月29日（日）、同上。
- 87 会期：平成28年11月12日（土）～平成29年3月5日（日）、同上。
- 88 会期：平成30年11月10日（土）～平成31年2月24日（日）、同上。
- 89 岡田豊一（2014）「ツーリズム・デスティネーション・マーケティングの基本的フレームワークについて」『城西国際大学紀要』第22巻第6号、13頁
- 90 山岸郁子（2012）「資源としての文学」『日本大学経済学部産業経営研究所所報』日本大学、23頁
- 91 津島佑子・他著（1992）前掲書、182頁
- 92 同上、183頁
- 93 同上、185頁
- 94 同上、189頁
- 95 坪内祐三 荒川洋治編（2002）『明治の文学 第9巻 徳田秋聲』筑摩書房、403頁
- 96 秋聲の自伝的小説『光を追うて』（1938）の作中には、卯辰山の別名愛宕山を借りてこのように述べてある。「其の山は飛驒境の空に聳え立つた中央山脈の余勢の窮まるるところの末葉山脈が、なだらか

に裾をひいた其の一端に当たるもので、(中略) 生長してから、孤独になりたい気持の動く時など、等はよく本を懐ろにして、時には登り口をもつと奥の方の春日山口のいくらか峻しい方へかへたりして駆け登り、谷から聞こえて来る薪割りの斧の音と、時雨のやうな松の枝葉の風の音を耳にしながら、草のうへに脚を投げ出してゐたものだが、小学生時代にも、この山は自分の庭のやうに行きつけになつてゐた。「文学への旅 金沢・名作の舞台」編集委員会編(2000)『文学への旅 金沢・名作の舞台』金沢市企画・発行、秋山稔(2000) 36頁。『光を追うて』は徳田秋聲著、松本徹編解説(1999)『作家の自伝 83 徳田秋聲』日本図書センター。

97 坪内祐三 荒川洋治編(2002)『明治の文学 第9巻 徳田秋聲』筑摩書房、381頁、414頁

98 『日本の詩歌 15 室生犀星』(1968) 前掲書、14頁

99 井坂洋子(2015)『詩はあなたの隣にいる』筑摩書房、29頁

100 宮下志朗、小野正嗣編著(2016)、小野正嗣「フランス文学とクレオール性の文学—『異郷』で発見する『故郷』」『世界文学への招待』一般財団法人放送大学教育振興会、78頁。

101 莫言(2000)『莫言散文』浙江文芸出版社、240頁、245頁、246頁(原文中国語、訳は筆者)。

102 阿比留勝利(2010) 前掲書、1頁

103 ヴァルター・ベンヤミン(1997) 久保哲司訳『ベンヤミン・コレクション 3 記憶への旅』(ちくま学芸文庫) 筑摩書房、536頁

The Role of Literature Museum Facilities
towards Community Development
— Focusing on Examples of the Memorial Museums of Izumi Kyoka,
Tokuda Shusei and Muro Saisei in Kanazawa City

Jiang Dongxing

Abstract

Taking as examples the literature museums of Izumi Kyoka, Tokuda Shusei, Muro Saisei, this article elaborates what effects a literature museum can have on Machizukuri, what interrelationship there is between a literature museum and the local community building, furthermore how could a literature museum and Machizukuri could build on each other.

Generation of literature museum actively reinvests in the community. The spirit of the study of generational literature contributes to the spirit of the community. The literature museum's ability to bring community together stems from a deep desire to do so.

Key words: literature museum, writer, community building, build on each other, reinvest, spirit, hometown